

# がん化学療法の投与ルート変更における 医療安全管理と医療材料費の削減

水津智樹<sup>†</sup> 田路章博\* 長谷川英利  
畑 裕基 吉野宗宏 粉川俊則\*

IRYO Vol. 77 No. 4 (262-266) 2023

## 要旨

抗がん薬の職業性曝露対策として注射抗がん薬の調製および投与に閉鎖式薬物移送システム (closed system drug transfer device : CSTD) の使用が推奨されている。今回、CSTDの使用法の改善と医療材料費の削減を目的に、同システムの投与ルートをI型からY型へ変更し、医療安全管理および医療材料費の評価を行った。レジメンの投与図、投与ルートの接続順などの投与時の注意点について電子カルテと注射箋に登録し、医療安全上の工夫を施した。投与ルートの変更前後における、投与ルート接続に関する問い合わせ件数とインシデント件数、CSTDの使用数と医療材料費について調査した。投与ルートの変更後における接続順等に起因するインシデントはなかった。また、輸液バッグに装着するCSTDであるバッグスパイクおよび投与ルートの使用量が減少した。その結果、月平均366,606円の医療材料費削減となった。自施設が採用している医療材料の特性と価格をよく理解し、それらを医療安全に配慮したうえで適切に変更することで、医療材料費の削減に貢献できることが示唆された。

キーワード 閉鎖式薬物移送システム, 投与ルート, 医療材料費, 医療安全

## 緒 言

がん薬物療法における職業性曝露対策ガイドラインでは、抗がん薬の職業性曝露対策として注射抗がん薬の調製、投与に閉鎖式薬物移送システム (closed system drug transfer device : CSTD) の使用が推奨されている<sup>1)</sup>。CSTDは各社から販売されており、調製面ではそれぞれのデバイスに対して薬剤曝露量や調製時間の変化などについての報告がなされている<sup>2) 3)</sup>。一方、投与時の曝露量低減化についての報

告はあるが<sup>4)</sup>、投与ルートの変更による医療安全管理および医療材料費についての評価はなされていない。

注射抗がん薬をCSTDの投与ルートで投与するにあたり、メインルートのみで注射薬を順次取り換えて投与する方法 (I型) と、メインルートと側管を用いて投与する方法 (Y型) があり、各施設の運用に応じた使用が可能である (図1)。各社から販売されているCSTDルートについて、器具の接続方法等に違いはあるものの、I型/Y型ルートの基本的な

国立病院機構大阪医療センター 薬剤部, \*国立病院機構大阪南医療センター 薬剤部  
著者連絡先: 水津智樹 大阪医療センター薬剤部 〒540-0006 大阪市中央区法円坂2-1-14  
e-mail : suizu.tomoki.rh@mail.hosp.go.jp  
(2022年9月28日受付 2023年4月14日受理)

Medical Safety Management and Reduction of Medical Material Costs in Changing the Route of Administration of Cancer Chemotherapy

Tomoki Suizu, Akihiro Taji\*, Hidetoshi Hasegawa, Hiroki Hata, Munehiro Yoshino and Toshinori Kokawa\*

NHO Osaka Medical Center, \*NHO Osaka Minami Medical Center

(Received Sep.28, 2022, Accepted Apr.14,2023)

Key words : closed system drug transfer device, administration route, medical material costs, medical safety